

## 「漆掻き技術」無形文化遺産に登録

青森県との境に位置する岩手県・二戸市（にのへし）の漆掻き職人らが継承する「伝統建築工匠（こうしょう）の技 木造建造物を受け継ぐための伝統技術」が昨年12月、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録された。国産漆の約8割を占め、日本一を誇る浄法寺漆の文化継承や観光振興の追い風になると、地元で喜びが広がっている。

伝統技術の対象は17分野の「選定保存技術」。自然の素材で地震や台風に耐える構造をつくり、法隆寺に代表される日本の伝統的な建築文化を支えてきた。14の保存団体が認定されており、「日本産漆生産・精製」の分野で認定されているのが二戸市の日本うるし掻き技術保存会（工藤竹夫会長）だ。20～80代の漆掻き職人50人で組織し、質の高い漆掻き技術を継承している。

国産漆は、中国産漆が流通し販売に苦慮した時代を経て、2015年に文化庁が国宝などの建造物修復に使用する方針を打ち出したことで需要が急増。漆掻き職人を目指す地域おこし協力隊員も全国から訪れ、生産量も15年の0.82トﾝが昨年は1.49トﾝまで増えている。

一方で、さらなる生産量の増加には原木の確保が課題。漆が掻けるほどに成長するには15年ほどかかるとされており、市は毎年2万本ずつ植樹し続ける計画を立てている。連携協定を結ぶ民間企業や市民らが参加する植樹祭も開かれ、漆文化継承の輪が広がっている。

漆をめぐるのは昨年6月、二戸市と隣接する八幡平市（はちまんたいし）にまたがる漆文化が「〃奥南部、漆物語～安比川流域に受け継がれる伝統技術」として日本遺産に登録された。無形文化遺産登録と併せ、小中学生をはじめとした市民が漆文化を学び、地元愛や誇りを醸成する機会ともなっている。人口減少が進む中、漆という「宝」を活用したまちづくりで交流人口増加にも期待がかかる。一人でも多くの人に、漆の里を訪れて魅力に「かぶれて」もらいたい。

岩手日報社 二戸支局長 阿部友衣子



手作りのくす玉を割り無形文化遺産登録の喜びを分かち合う関係者



無形文化遺産に登録された漆掻き技術。漆掻き職人が長年にわたり継承している